

# 白樂天の病状

丹羽博之

中唐の詩人白樂天の日本文学に与えた影響ははかり知れないものがあり、今後の研究の深化によって更に新たな知見も出てくるものと思われる。

その白樂天は他の中国の詩人たちに比して、官人としての栄達にしても、経済的な面での裕福さにおいても、おおむね順調な生涯を送り、会昌六年に七十五歳で天寿を全うしている。一見幸福な生涯を過ごしたかのように思われる白樂天ではあるが、少年の頃から病弱であったようで、特に三十代半ばから次第に体の不調を詩の中で訴えるようになってくる。

白樂天の詩文中には、自らの病を詠んだものが数多くあり、白樂天の健康状態、彼の病気に關してはすでに以下のような先学の論考がある。

萱沼明氏「白樂天の眼病」(『日本經濟新聞』昭和三十六年二月十日)

今井清氏「白樂天の健康状態」(『東方學報』昭和三十九年十月)

山田勝久氏「晩年の白樂天」(『唐代文学の研究』笠間書院)

埋田重夫氏「白居易詠病詩の考察―詩人と題材を結ぶもの―」(『中国詩文論叢』第六集 昭和六十二年六月)

白樂天の病状

本稿ではこれらの先学の驥尾に附して、『白氏文集』に表われた彼の病状を分析し、彼の患った病気を探り、併せてこれらの病が白樂天の文学に与えた影響を探りたい。

## 一、消渴病

私が先ず白樂天の病に関して興味を抱き始めたのは、次の詩句からである。

慵於<sub>レ</sub>替<sub>二</sub>叔夜<sub>一</sub> 渴似<sub>二</sub>馬相如<sub>一</sub>

(「酬<sub>二</sub>令狐留守尚書見<sub>レ</sub>贈十韻<sub>一</sub>」卷五十七・2734 五十七歳。年齢は、花房英樹氏「繫年表」『白氏文集の批判的研究』によった。)

この「渴似馬相如」の詩句に対して佐久節氏訳註『白樂天全詩集』は「馬相如よりも渴す」と訓読し、「馬相如 漢の司馬相如。常に消渴の疾あり。消渴は糖尿病なりといふ。」と註している。『史記』「司馬相如列伝」には、

相如口吃而善著<sub>レ</sub>書。常有<sub>二</sub>消渴疾<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>卓氏<sub>一</sub>婚、饒<sub>二</sub>於財<sub>一</sub>。未<sub>二</sub>曾肯与<sub>二</sub>公卿国家之事<sub>一</sub>、称<sub>レ</sub>病間居、不<sub>レ</sub>慕<sub>二</sub>官爵<sub>一</sub>。

とあり、司馬相如は消渴疾を患っていた記述が見える。司馬相如が消渴疾を病んでいたことは有名なことであり、六朝詩以来の用例がある。堀誠氏は次のような例を示されている(「相如の渴き」『節令』第8期 昭和六十三年九月)。

誰慕臨淄鼎 常希茂陵渴

(齋謝朓「冬緒羈懷示<sub>二</sub>蕭諮議虞劉江<sub>一</sub>二常侍<sub>一</sub>詩」)

長卿病<sub>二</sub>消渴<sub>一</sub> 壁立還<sub>二</sub>成都<sub>一</sub>

(陳張正見「置<sub>二</sub>酒高台上<sub>一</sub>」)

実は詩聖杜甫もこの消渴を患つており、<sup>注1</sup>詩中で度々訴えている。

新亭拳<sub>レ</sub>日風景切 茂陵著<sub>レ</sub>書消渴長

(「十二月一日三首(其二)」卷十四)

我雖<sub>ニ</sub>消渴甚<sub>ニ</sub> 敢忘<sub>ニ</sub>帝力勤<sub>ニ</sub>

(「別<sub>ニ</sub>蔡十四著作<sub>ニ</sub>」 卷十四)

我多<sub>ニ</sub>長卿病<sub>ニ</sub> 日夕思<sub>ニ</sub>朝廷<sub>ニ</sub>

肺枯渴太甚 漂泊公孫城

・(「同<sub>ニ</sub>元使君春陵行<sub>ニ</sub>」 卷十九)

病渴身何去 春生力更無

(「過<sub>ニ</sub>南嶽<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>洞庭湖<sub>ニ</sub>」 卷二十二)

長卿は司馬相如の字で、このほかに、杜甫はしばしば司馬相如に我が身を引き比べて消渴の病を訴えている。

この消渴の病というのは、現代医学で言うところの糖尿病に該当する。『広漢和辞典』には、

「消渴」<sub>シヨウ・カツ・シヨウ</sub> 病名。 のどがかわいて流動食をほしがり、小便の通じない病氣。消中。糖尿病。消渴。(『史記』司馬相如伝を引く。)

とあり、『日本国語大事典』の「糖尿病」の項には、

すい臓から出るインシュリンというホルモンの分泌が不十分なために、糖の利用が行われず、血液中のぶどう糖の値が高くなり尿にも排泄される内分泌疾患。自覚症状としては多飲、多尿、脱力感、羸瘦(るいそう) または肥満を示し、感染に対する抵抗性の減弱、動脈硬化の促進、神経、網膜症、腎障害をきたすことが多い。

とあり、この糖尿病の典型的な症状には、

A のどがかわく

B からだがだるい

C おなかがすく

D からだがやせてくる

白楽天の病状

白樂天の病状

E 目や歯が悪くなる

F 皮膚がかゆくなる

G 結核や肺炎に感染しやすい

などがあげられる。

さて、彼の作品中において、訴えている病状を分析していく。

二、身体の羸瘦

三十代前半までは「新樂府」等の諷諭の詩が多く、白樂天自身の身边を詠じた詩は比較的少ない。ところが、三十代後半からは次第に体の不調を訴えるようになってくる。その一つが体がやせ細ってきたことを歎く詩である。

龍臥心有<sub>レ</sub>待 鶴瘦貌<sub>レ</sub>弥清

（「酬<sub>二</sub>楊九弘貞長安病中見<sub>一</sub>寄」卷五・0203 三十五才）

両眼目将<sub>レ</sub>闇 四肢漸<sub>レ</sub>衰瘦 束帶曠<sub>二</sub>昔圍<sub>一</sub> 穿衣妨<sub>二</sub>寛袖<sub>一</sub>

（「不二門」卷十一・0545 四十九才）

潦倒親知笑 衰羸旧識驚

（「江州赴<sub>二</sub>忠州<sub>一</sub>至<sub>二</sub>江陵<sub>一</sub>以来舟中示<sub>二</sub>舍弟<sub>一</sub>五十韻」卷十七・1104 四十八才）

貌将<sub>レ</sub>松共瘦 心与<sub>レ</sub>竹俱空

（「偶題<sub>二</sub>閣下廳<sub>一</sub>」卷十九・1265 五十一才）

擘<sub>レ</sub>帶知<sub>二</sub>腰瘦<sub>一</sub> 看<sub>レ</sub>燈覺<sub>二</sub>眼昏<sub>一</sub>

（「晚歲」卷二十・1343 五十一才）

病瘦形如鶴 愁焦鬢似蓬

（「新秋病起」卷二十・1375 五十二才）

關間僧尙閑 較瘦鶴猶肥

（「自詠」卷六十六・3237 六十五才）

などが瘦せたことを歎く代表的な例であるが、白樂天はその作品中において頻繁に我が身のやせ細ってきたことを歎いている。しかも、急にやせ細ったという印象を受ける。また、「沐浴」と題する詩では

経年不沐浴 塵垢滿肌膚

今朝一澡濯 衰瘦頗有餘

老色頭鬢白 病形肢體虛

衣寬有賸帶 髮少不勝梳

自問今年幾 春秋四十初

四十已如此 七十復何如

（卷十・0479 四十一、二才）

とあり、三十代後半から、以前にくらべて著しく体が痩せ細ったことを歎いている。食欲が無く、次第に体がやせ細っていくのは当然のことであるが、白樂天は旺盛な食欲を詩中に示している。

食飽摩挲腹 心頭無一事

（「寄皇甫賓客」卷五十一・2235 五十七才）

飽食為日計 穩睡是身謀

（「想東遊」五十韻」卷五十七・2717 五十八才）

飽食不出門 閑坐不下堂

白樂天の病状

〔「飽食閑坐」卷六十三・3006 六十三才〕

何以療<sub>レ</sub>夜飢<sub>一</sub> 一匙雲母粉

〔「宿<sub>レ</sub>簡寂觀」卷七・0283 四十五才〕

など、日常の飽食ぶりを誇らしげに詠んでいる。このほかにも「食飽」（卷八・0367 五十二才）の詩を詠じたり、自らを「饞叟」（「二年三月五日齋畢開<sub>レ</sub>素當<sub>レ</sub>食偶吟。贈<sub>二</sub>妻弘農郡君<sub>一</sub>」卷六十九・3543 七十一才）と呼ぶ。このように彼は大食漢であり、その健啖ぶりをいささか誇らしげに詠んでいる。しかも、なお、体は「較<sub>レ</sub>瘦鶴猶肥」という状態であった。いくら食べても、体が次第にやせ細っていくのは、悪性腫瘍（所謂癌）、バセドー氏病、糖尿病が先ず考えられる。以後の彼の長命から、悪性腫瘍は考えられない。先ず、考えられるのは代謝異常による糖尿病である。当時としては腹一杯食べられることは幸福なことの一つであったと思われる。ところが皮肉にも、この恵まれた食生活が彼の病を悪化させていったものと想像される。また、彼が、酒豪であったことは広く知られているところであるが、彼の大酒と飽食による高カロリー摂取が糖尿病の誘因になったものと思われる。糖尿病では、体内で糖質が十分利用されず、尿糖となって排出されるので自然とおなかがすいて大食となる。その表われが、これらの大食を詠んだ漢詩となったものであろう。

また、同病であったと思われる杜甫も同じく

羸瘠且如何 魄奪鍼灸屢

〔「詠懷二首（其二）」卷二十二〕

衰年病祗瘦 長夏想<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>情

〔「江閣臥<sub>レ</sub>病、走<sub>レ</sub>筆寄<sub>二</sub>呈崔・盧兩侍御<sub>一</sub>」同〕

と頻りに体が瘦せたこと詠じている。

### 三、喉の乾き

糖尿病の典型的な症状に、喉の乾きがある。白楽天も前掲のごとく、「渴似馬相如」と自らはつきりと述べる以外にも

飢来吞<sub>二</sub>熱麵<sub>一</sub> 渴来吞<sub>二</sub>寒泉<sub>一</sub>

(「思<sub>レ</sub>旧」 卷六十一・2981 六十三才)

飢聞<sub>二</sub>麻粥香<sub>一</sub> 渴覺<sub>二</sub>雲湯美<sub>一</sub>

(「七月一日作」 卷六十二・3038 六十四才)

琴裏知聞唯淥水 茶中故旧是蒙山

窮通行止長相伴 誰道吾今無<sub>二</sub>往還<sub>一</sub>

(「琴茶」 卷五十五・2518 五十五才)

夜茶一兩杓 秋吟三数声

(「立秋夕有<sub>レ</sub>懷<sub>二</sub>夢得<sub>一</sub>」 卷六十二・2965 六十二才)

など、喉が乾くとお茶を飲む、と詠んでいる。これらの多くは「飢」と対になって詠まれており、かならずしも事実ではなく、文学的な装飾も考えられなくはない。しかし、挙例以外にも多くの「渴」の使用があり、やはり、これらの使用は事実の反映、喉が乾きやすかったこととの表われではないだろうか。大酒による喉の乾きも少しはあろうが、糖尿病の典型的な症状の表れと見るべきであろう。そして、こうした喉の乾きの結果茶を愛飲したのではと推察される。

同病であった杜甫も前掲の「病渴身何去」以外にも

才尽傷<sub>二</sub>形骸<sub>一</sub> 病渴汚<sub>二</sub>官位<sub>一</sub>

(「送<sub>二</sub>顧八分文学適<sub>二</sub>洪・吉州<sub>一</sub>」 卷二十二)

白楽天の病状

白樂天の病状

永念病渴老 附書遠山顛

(「湘江宴、饒<sub>ニ</sub>裴<sub>ニ</sub>二端公赴<sub>ニ</sub>道州<sub>」</sub> 卷二十二)

と喉の乾きを病むと頻りに訴えている。

四、目の病

こうした代謝異常による糖尿病の状態が長く続き、進行すると毛細血管に異変を来すようになる。その結果、糖尿病の合併症として目に異常を来すことが多い。

白樂天が目の病を宿病として患っていたのは有名なこと<sup>注2</sup>で、白詩には、

漠漠病眼花 星星愁鬢雪

(「別<sub>ニ</sub>行簡<sub>」</sub> 卷十・0462 四十三才)

散乱空中千片雪 蒙籠物上一重紗

縦逢<sub>ニ</sub>晴景<sub>」</sub>如<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>霧 不<sub>ニ</sub>是春天<sub>」</sub>亦見<sub>レ</sub>花

僧説客塵来<sub>ニ</sub>眼界<sub>」</sub> 医言風眩在<sub>ニ</sub>肝家<sub>」</sub>

両頭治療何曾差 藥力微茫仏力贖

(「眼病<sub>」</sub>二首<sub>」</sub> 卷五十四・2477 五十五才)

眼臟損傷来已久 病根牢固去<sub>レ</sub>難

医師尽勤先停<sub>レ</sub>酒 道侶多教早罷<sub>レ</sub>官

案上謾鋪<sub>ニ</sub>龍樹論<sub>」</sub> 盒中虚貯<sub>ニ</sub>決明丸<sub>」</sub>

人間方藥<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>益 争得<sub>ニ</sub>金篦<sub>」</sub>試刮看



(同)

頭風目眩乗<sub>二</sub>垂老<sub>一</sub> 祇有<sub>二</sub>増加<sub>一</sub> 豈有<sub>レ</sub>瘳

花発<sub>二</sub>眼中<sub>一</sub> 猶足<sub>レ</sub>怪 柳生<sub>二</sub>肘上<sub>一</sub> 亦須<sub>レ</sub>休

(「病<sub>二</sub>眼花<sub>一</sub>」 卷五十八・2871 六十才)

など目の病を訴えている。それも眼精疲労のような一過性のもではなく、「眼臓損傷来已久」と訴えるようにかなり長期に渡る病のようであった。同じく杜甫もよく似た症状を訴えている。

春水船如<sub>二</sub>天上坐<sub>一</sub> 老年花似<sub>二</sub>霧中看<sub>一</sub>

(「小寒食舟」 卷二十三)

前掲の白樂天の「縦逢<sub>二</sub>晴景<sub>一</sub> 如<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>霧<sub>一</sub>」と「花似<sub>二</sub>霧中看<sub>一</sub>」は共に霧を通して看る、とよく似た症状であり、どちらも糖尿病の合併症による目の疾患(白内障か)が考えられる。

## 五、齒の病

糖尿病の合併症状は先ず、目と齒に現われてくる。白樂天は早くも四十過ぎから齒が抜け始める。

四十未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>老 憂傷早衰惡

前歲二毛生 今年一齒落

(「自覺二首(其一)」 卷十・0483 四十才)

鬢髮蒼浪牙齒疎 不<sub>レ</sub>覺身年四十七

(「浩歌行」 卷十二・0580 四十七才)

我齒今欲<sub>レ</sub>墮 汝齒昨始生

白樂天の病状

〔「吾雛」 卷八・0364 五十一才〕

と詠み、早くも四十の頃から歯が抜けはじめだし、四十七のときには歯がまばらになったと歎いており、このほかにも

老去齒衰嫌<sub>二</sub>橘酢<sub>一</sub> 病来肺渴覺<sub>二</sub>茶香<sub>一</sub>

〔「東院」 卷二十・1332 五十一才〕

秋来軫覺<sub>二</sub>此身衰<sub>一</sub> 晨起臨<sub>レ</sub>階盥漱時

漆匣鏡明頭尽白 銅瓶水冷齒先知

〔「新秋早起有<sub>レ</sub>懷<sub>二</sub>元少尹<sub>一</sub>」 卷十九・1243 五十才〕

齒傷朝水冷 貌苦夜霜嚴

〔「不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>來飲<sub>レ</sub>酒七首（其一）<sub>一</sub>」 卷五十七・2763 五十九才〕

など、すっぱい物や冷たいものが歯にしみることを訴えている。糖尿病の患者の七割は歯槽膿漏等の糖尿病性歯周破壊症に患かるといわれている。これは先に触れた喉の乾きとも関連しており、喉が乾くというのは唾液の分泌が減少しているために起こるもので口中の自浄作用が減退し、炎症などを引き起こす。更に歯槽膿漏が進行すると歯の肉が落ちて歯が露出し、その神経に冷水やすっぱい物が染み、歯痛をひき起こす。これらの結果、例示したような歯の障害が出てきたものと推察される。同病であったと思われる杜甫も歯を患っており、

君不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>夔子国社陵翁 牙齒半落左耳聾

〔「復陰」 卷二十一〕

と歯が抜けたことを詠んでいる。

## 六、胸の病

糖尿病患者は、一般に細菌に対する抵抗力が弱くなっており、種々の感染症にかかりやすい。特に、呼吸器系の感染症に罹患しやすい。

これには肺結核、肺炎、気道感染（咽道炎、気管支炎）などがある。

白楽天もしばしば胸の病に冒されている。

肺病不<sub>レ</sub>飲<sub>レ</sub>酒 眼昏不<sub>レ</sub>読<sub>レ</sub>書

（「閑居」巻七・0326 四十七才）

羶膩断来無<sub>二</sub>氣力<sub>一</sub> 風痰惱得少<sub>二</sub>心情<sub>一</sub>

（「病中早春」巻十五・0329 四十四才）

氣嗽因<sub>レ</sub>寒発 風痰欲<sub>二</sub>雨生<sub>一</sub>

（「病中書<sub>レ</sub>事」巻五十三・2339 五十三才）

春来痰氣動 老去嗽声深

（「自歎」巻五十四・2456 五十五才）

肺傷妨<sub>レ</sub>飲<sub>レ</sub>酒 眼痛忌<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>花

（「和<sub>二</sub>劉郎中曲江春望見<sub>二</sub>示<sub>一</sub>」巻五十六・0347 五十八才）

こうした喉や胸の病は、風邪などをひけば誰にでも現われる症状のようではあるが、その頻度などから考えて、糖尿病が誘因となつてこれらの喉や胸の炎症を起こしたのではないかと想像される。<sup>注3</sup> 同じく杜甫も

垂年病肺惟高<sub>レ</sub>枕 絶塞愁時早閉<sub>レ</sub>門

（「返照」巻十五）

我多<sub>二</sub>長卿病<sub>一</sub> 日夕思<sub>二</sub>朝廷<sub>一</sub>

肺枯渴太甚 漂泊公孫城

（「同<sub>二</sub>元使君舂陵行<sub>一</sub>」巻十九）

\*長卿は司馬相如の字である。

白楽天の病状

白樂天の病状

歸朝跼<sub>レ</sub>病肺<sub>一</sub> 叙旧思<sub>レ</sub>重陳<sub>一</sub>

(「敬寄<sub>レ</sub>族弟唐十八使君<sub>一</sub>」卷二十一)

と、胸の病をしばしば訴えている。

七、皮膚の病

糖尿病のときは細菌に対する皮膚の抵抗力も低下しており、でき物になりやすい。白樂天は、足にでき物ができたことを詠んだ珍しい詩がある。

門有<sub>レ</sub>医来往 庭無<sub>レ</sub>客送迎<sub>一</sub>

病銷<sub>レ</sub>談笑興<sub>一</sub> 老足<sub>レ</sub>歎嗟聲<sub>一</sub>

鶴伴臨<sub>レ</sub>池立 人扶下<sub>レ</sub>砌行<sub>一</sub>

脚瘡春斷<sub>レ</sub>酒 那得<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>心情<sub>一</sub>

(「病瘡」卷七十一・3618 七十三才)

また、

去冬病<sub>レ</sub>瘡瘡<sub>一</sub> 將養遵<sub>レ</sub>醫術<sub>一</sub>

(中略)

遂使<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>酒人<sub>一</sub> 停<sub>レ</sub>盃一百日

(「二月一日作贈<sub>レ</sub>韋七庶子<sub>一</sub>」卷六十三・3615 六十四才)

とある。「病瘡」の詩の場合も「斷酒」のことが詠まれており、この「瘡瘡」も今井清氏が言われるように「おでき」であろう(前掲今井氏論文)。このように白樂天は度々おできに悩まされているが、これも糖尿病に因る皮膚の細菌に対する抵抗力の低下の表われと考えられ

る。

更に、皮膚がかゆくなるのも糖尿病の症状の一つである。これは血糖量が増えたと末梢神経を刺激し、そのことによってかゆみが起こると考えられている。僅かに一例ではあるが、白楽天は死の直前に

寿及<sub>二</sub>七十五<sub>一</sub> 寿は七十五に及び

棒霑<sub>二</sub>五十千<sub>一</sub> 棒は五十千に霑ふ

(中略)

支<sub>二</sub>分閑事<sub>一</sub>了 閑事を支分し了り

爬<sub>レ</sub>背向<sub>レ</sub>陽眠 背を爬きて陽に向ひて眠る

(「自詠<sub>二</sub>老身<sub>一</sub>示<sub>二</sub>諸家屬<sub>一</sub>」 卷七十一・3654 七十五才)

と詠んでいる。背中を搔くと言った一見何気ないような表現であるが、このような俗な表現は詩中に詠まれることは珍しく、わざわざ使用したことの裏には実際に背中がかゆかったものであろう。皮膚がかゆくなると必然的にその部分を搔くことになるが、そうした掻き傷のあとから細菌に感染しやすくなり、糖尿病による抵抗力の低下と相まって、先に述べたようなおできなどができやすくなる。

#### 八、脱力感、無気力

身体がなんとなくだるく疲れやすいという症状も糖尿病の患者によく見られる症状である。白詩にこうした表現が多々見られる事についてはすでに、小島憲之氏が、「モノウシで代表される「懶」「嫩」(lan)「慵」(yong)の用例は、白詩に三十例を遙かに越え、更に「慵懶」の熟語を見る。」「しかし白詩のモノウシの中心は、むしろ彼の心情をめぐって表現される。このモノウシは、白詩を特徴付ける「白詩語」の一つといえる。」と述べられている(『古今集以前』)。

白詩には、何をするにもモノウイと詠み込んだ「有<sub>レ</sub>官慵不<sub>レ</sub>選 有<sub>レ</sub>田慵不<sub>レ</sub>農」で始まる(「詠慵」 卷六・3269 四十三才)や「太守知<sub>レ</sub>慵

放「晩衙」(「北亭招客」卷十六・0923 四十五才)の詩もあり、「百年慵裏過 万事醉中休」(「閑坐」卷十九・1306 五十一才)の句もあり、彼がモノウキ性質だったことを雄弁に物語っている。このように白詩を特徴づけるモノウシも糖尿病による症状の表われの一つと考えることもできよう。

九、動脈硬化と高血圧、脳卒中

動脈硬化は、誰しも年を取るにつれて次第に起こってくるものであるが糖尿病の人は、この動脈硬化が普通の人よりも早く、より強く起こってくるといわれている。糖尿病の人は、血管の動脈硬化性変化、高血圧その他の循環障害などが原因となって、脳卒中その他の脳循環障害を起こすことも少なくなく、発作を起こす意識障害や半身の不随を招く。

多飲と飽食の毎日を過ごした白樂天は六十八歳の冬に中風に患る。

開城已未歳余蒲柳之年六十有八、冬十月甲寅且始得「風痺之疾」。体癢目眩。左足不<sub>レ</sub>支。

(「病中詩十五首序」卷六十八)

六十八衰翁 乗<sub>レ</sub>衰百疾攻

朽株難<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>蠹 空穴易<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>風

肘痺宜<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>柳 頭旋劇<sub>二</sub>転蓬<sub>一</sub>

恬然不<sub>レ</sub>動処 虚白在<sub>二</sub>胸中<sub>一</sub>

(「初病<sub>レ</sub>風(其一)」卷六十八・3408 六十八才)

とその時の事情を述べている。幸いにこの時の発作は軽く、半身が不自由になっただけで大事には至らなかったようである。

このように白樂天が六十八歳で脳の循環器障害を起こしたのは、日日の大酒に因るところが大きいと思われるが、糖尿病に付随して起こる動脈硬化も一因となつたのではないか。

## 十、無痛と環境

こうした様々な症状を伴う糖尿病ではあるが、幸いにどの症状もそれだけでは生命の危機を伴うものではなく、また痛みもない。白樂天自身も体は不調で、痩せ、老けたと歎きながらも長命であったし

身雖<sub>二</sub>日漸老<sub>一</sub> 幸無<sub>二</sub>疾病痛<sub>一</sub>

（「安穩眠」 卷五十一・2297 五十九才）

と述べる。このほかにも「幸無<sub>二</sub>急病痛<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>苦飢寒<sub>一</sub>」（「朝歸書寄」元八）卷六・0266 四十四才）、「体中無<sub>二</sub>病痛<sub>一</sub> 眼下未<sub>二</sub>飢寒<sub>一</sub>」（「初夏間吟兼呈<sub>二</sub>上韋賓客<sub>一</sub>」 卷六十五・3169 六十三才）と痛みのないのを喜ぶ。

糖尿病は遺伝する病気であり、糖尿病の病気を親に持つ人は、糖尿病の素質を親から受け継ぐことが考えられるので糖尿病になりやすい。白樂天は母が病がちであったこと次のように訴えている。

臣母多病 臣家素貧

（「奏<sub>二</sub>陳情<sub>一</sub>狀」 卷四十一・1971 三十九才）

或は、母のこの多病の内いくつかは、糖尿病の余病によるものであったかもしれない。

また、糖尿病は遺伝的なものと、後天的な生活環境、生活習慣とも密接な関係がある。糖尿病は一般に、経済的に恵まれた知識階級に多い病気だといわれている。このように糖尿病は経済的に裕福で、美食を好み、運動をせず、精神的には悩みが多いといった人に多く起こる病気である。

白樂天は正にこれらの条件を満たしていると言える。彼が余り体を動かさなかったことは彼自身次のように詠んでいる。

飽食坐終<sub>レ</sub>朝 長歌醉通<sub>レ</sub>夕

（「詠懷」 卷八・0359 五十一才）

飽食不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>門 間坐不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>門

(「飽食間坐」卷六十三・3006 六十三才)

このような飽食と運動不足が糖尿病の誘因となり、更には病状を悪化させていったものと思われる。

白樂天自身は、自らの病に關して

黒花滿<sub>レ</sub>眼糸滿<sub>レ</sub>頭 早衰因<sub>レ</sub>病病因<sub>レ</sub>愁

(「自問」卷十九・1256 五十才)

と述べており、これは、先にあげた糖尿病の誘因の一つである精神的には悩みが多いに合致するものである。但し、これは文学的誇張もあり、多少は割引いて考えるべきであろうが、このような精神的なストレスも彼の糖尿病に誘因になったのかもしれない。

## 結語

以上、『白氏文集』の中に表われた白樂天の症状を総合的に検討した場合、特に、飽食と体の痩せは体内での代謝異常(糖尿病)以外では説明がつきにくく、その他の症状も糖尿病の合併症状の表われと見た場合説明がつく。

白樂天は四十歳前後から急激に痩せ始めており、ほぼ時を同じくして、喉の乾き、目や歯の疾患を訴えており、この数年前から発病したと考えられ、成人病といわれる糖尿病の発病年齢にはやや早い矛盾はしない。

次に、この病が白樂天及び彼の文学にどのような影響を与えていったかを考察したい。

白樂天の文学を特徴づける語として、小島憲之氏も述べられたように「慵」の語がある。何をするにも「慵」と言う表現が頻繁に登場し、彼の文学の一つの特徴となっている。これは、彼の生まれつきの性格、文学的ポーズも考慮されるが其のものの憂き性格を形成する一因として糖尿病による気力の衰え、脱力感、つかれ易さが関係したと考えられる。また、小島憲之氏がすでに触れられたことであるがモノウシと朝遅くまで眠る「日高眠」が結び付いてよくよまれるのも糖尿病の症状によるものかもしれない。『枕草子』にも名高い「日高く眠足れるも



猶し起くるにものうし」にも、その影を見る思いがする。

白樂天の詩には老いを詠んだ詩が多いが、早く老けたというよりも、目の病、歯の衰え、気力の減退、身体が痩せて来たことに関しては、糖尿病による合併症によるものと考えられる。但し、当時はこのような医学的なことは当然ながら知られておらず、白樂天は忍び寄る老いの表われと思い、多くの嘆老の詩を詠んだとも考えられる。このほか、白髪や脱毛を歎く詩も多いが、これらは糖尿病との関係は少ないと思われる。

白樂天は人生の後半において、政治への関心を弱め、仏教へ沈潜していったが、このことも糖尿病による無気力、脱力感及び合併症による多くの病が彼を他人よりもまず、自分に目を向けさせた原因の一つになったと考えられる。「元輕白俗」と言われ、白樂天の詩は俗っぽいと評されたのも、日常身辺のことを詠むことが多くなったからで、そのことにも彼の持病が少しは関わっていたといえよう。

このほか素材に関しては堤留吉氏も『白樂天研究』で述べられているように、白詩には鶴が好んで詠まれている。その気高く、孤高の姿に彼は心ひかれたと思われるが、前掲のごとき我が身の痩せ具合との一体感、親近感もあったのではないだろうか。また、白樂天が酒と共に茶を愛飲したことも堤氏が述べられている。この茶の愛飲も糖尿病の代表的な症状の喉の乾きによるものと考えられなくもない。彼は飲酒のあとの喉の乾きを癒すためによく茶を飲むと自ら述べているが（「蕭員外寄新蜀茶」卷十四・0774 三十九才）、必ずしも飲酒による喉の乾きだけではないように思われる。

以上のようなことが、糖尿病という病が白樂天に与えた影響と言えよう。このように、糖尿病は彼の文学、人生に有形、無形の影を落しているといえるのではないか。

## 注

- 1 杜甫が糖尿病であったことは森野繁夫氏も『杜甫』（中国の詩人「集英社」）において少し触れられている。
- 2 白樂天が慢性的に目を患っていたのは、よく知られていることで、アーサー・ウェーリー氏『白樂天』（みすず書房）などでも言及されている。
- 3 今井清氏は、この胸の病を咯血の記述がないことから気管支炎か肺炎であろうと述べられている（前掲論文）。

## 白楽天の病状

\* 白詩は、四部叢刊に影印された那波道田活字本、杜詩は、清仇兆鰲撰『杜甫詳註』を底本とした『杜甫全詩集』（鈴木虎雄氏訳註）によった。糖尿病の病理、症状に関しては、森井知己氏『糖尿病』（日本書院）、高橋秀寿氏『糖尿病を食事で直す』（ナツメ社）及び『現代家庭医学事典』（講談社）などを参照した。

本稿を為すに当たって、医学面での助言を医師磯ノ上正明氏、歯科医師雲川晃氏、医師康兼正幸氏からいただきました。記して御礼申し上げます。

\* 本稿は昭和六十二年度和漢比較文学会大会（昭和六十二年十一月十五日於大正大学）で口答発表したものを加筆したものである。席上、御質問、御教示を賜った柳瀬喜代志氏、本間洋一氏、堀誠氏に心より御礼申し上げます。本稿は昭和六十二年度文部省科学研究費補助金「奨励研究A」による研究成果の一部である。